使用場面から見えてくる同格複合語の非等位性*

納谷亮平・石田崇

1. はじめに

同格複合語 (Appositional Compound) は、ある個人や個体が持つ異なる複数の性質を表す語から成る。例えば、writer-director は「脚本家かつ監督である個人」のことを表している。この例から分かるように、同格複合語は、構成素が and で結ばれるような意味関係にあるため、等位複合語として分類されている (Bauer (2008), Bauer et al. (2013))。同格複合語の特徴のひとつとして、構成素が原理的には交代可能であるという点が挙げられる (例: writer-director; director-writer) (Olsen (2001: 297))。しかし実際には、特定の要因によって一定の構成素順がより好まれることも指摘されている (Olsen (2001: 297), Lohmann (2014: Ch.5), Naya and Ishida (2021))。本稿では、同格複合語の構成素の位置関係が話者の使用意図に合わせて決まることを、情報構造といった談話との関係などに着目しながら論じる。その上で、具体的な使用場面から見てみると、同格複合語の構成素間の関係は、実際には非等位なものであるということを示す。一方従来の研究では、同格複合語の「等位性」が注目されてきたが、実際にはどのような意味で等位であるのかについて、本稿の議論から新たな示唆を提示したい。

2. 構成素の順序と談話の関係

同格複合語の構成素の順序を決定する要因のうち、談話との関わりをまとめると次のように言える。

(1) 談話上重要となる要素を右側に置く。

ここで言う「談話上重要となる要素」とは、具体的には、新情報や対比焦点を担うような要素が含まれる。まず、情報構造がどのように関わるか考えたい。情報構造が同格複合語内に反映される場合、「旧情報＋新情報」という順序になった構成素順が好まれることになる (Lohmann (2014), Naya and Ishida (2021))。Naya and Ishida (2021) は、旧情報のうち、「明示的に言及されていなくても、文脈や状況から推論などによって容易にアクセス可能な情報」という側面 (i.e., context-givenness) に注目し、これを担う構成素は左側に置かれる傾向にあることをインフォーマント調査から示した。その例として、(2)の絵本の作者 Ed Emberley に関する説明を挙げている。

(2) [絵本 *Go Away, Big Green Monster!* (Ed Emberley (1993), LB kids) 裏表紙より、下線を追加]
With exciting new edition that includes a shiny foil cover with die-cut eyes, Caldecott Award-winning <u>author-artist</u> Ed Emberley has created an ingenious way for kids to chase away their nighttime monsters.

ここでは、作者が author-artist として紹介されている。この複合語は、Ed Emberley が author と artist の両方の性質を持つことを示しているが、このうち Ed Emberley が author（「作家」）であるということは、絵本自体から明らかである点で旧情報にあたると考えられる。一方で、artist（「画家」）という性質はこの絵本からだけでは分からない、新しい情報となる。つまり、構成素をこの順序にすることによって、「作家である」という容易にわかる情報に加えて、「画家という側面を持っている」という新たな情報を加えて述べることになる。このような解釈をまとめれば、「文脈上誰のことか分かる作家がいて、その作家について言えば、その人物は画家でもある」と言える。右側が新情報を担っている点は、同絵本の別の版の同じ個所で author-illustrator が用いられていることからも分かる。ここでは、左側の author は変わらない一方、右側には illustrator という(2)の例とは異なる性質が示されている。これらの例から、author は文脈上旧情報として固定されている一方、右側で提示する性質については、新情報として状況などに合わせて新たに自由に導入できるということが分かる。

情報構造が構成素順に与える影響は、次のような作例からも示すことができる。(3)において、下線を引いた複合語の前の文脈では作家としての側面に関わる情報があり、複合語の後ろで画家としての側面に関わる情報がある。この情報の流れを逆にしているのが、(4)の例である (Naya and Ishida (2021: 52))。

(3) Naomi is famous for her detective novels, but she is an <u>author-artist</u>. In fact, her landscapes are exhibited at the city museum.

(4) Ken is famous for his oil paintings, but he is an <u>artist-author</u>. In fact, he has published several books.

各例において、文脈上の情報の流れに応じた構成素順がより好まれる。このことから、同格複合語の構成素順を決める要因のひとつとして、「ある人物・ものが持つ性質のうち、旧情報となっている性質を左側に置き、新情報を右側に置いて提示する」という話し手の意図を挙げることができる。

同格複合語の構成素順に関係する談話上の要因として次に挙げられるのは、対比焦点である。興味深いことに、singer-songwriter のような、特定の構成素順で辞書にも載っている同格複合語であっても、対比焦点が関わるような環境においては、構成素順が入れ替わる場合がある。例えば、ソングライターである Tom と Mary が

おり、Tom は歌手としての、Mary はギタリストとしての才能を併せ持つという場合、両者を次のように紹介することができる。

(5)　Tom is a songwriter-singer but Mary a songwriter-guitarist.　(Naya and Ishida (2021: 54))

ここで左側に置かれた songwriter というのは、Tom と Mary の両者に共通した性質である一方、右側に置かれた要素である singer と guitarist は、両者を区別して対比するような性質となっている。つまり、songwriter のうちどのような種類の songwriter であるかが、右側要素によって明確にされている。このような点を踏まえると、同格複合語の構成素順を決める要因として、「ある人物・ものが持つ性質のうち、他と共通の性質を左側に置き、異なる性質を右側に置いて対比させる」という話し手の意図を挙げることができる。

3. 意味カテゴリーの指定と構成素順

ここまで同格複合語の構成素順を決める要因として談話と関わる側面を見てきたが、次に考えたいのは、複合語全体の意味を決定する要素との関係である。そのために、(2)の文脈を改めて見たい。ここでは author-artist という形式が選択されていたが、興味深いことに、artist-author という逆の構成素順をより好ましいと判断するインフォーマントもいた。その理由として、Ed Emberley は「作家」であるので、その側面を中心として見ていることが挙げられる。つまり、author を右側に置いてその複合語全体が表す意味カテゴリーを「作家」に固定していると言える。左側要素である artist は、ここでは author を修飾する要素となっており、全体では「画家という側面を持った作家」という、限定複合語 (Attributive Compound) の場合と同様の解釈を持つ。このような構成素順・解釈を好む話し手は、談話との関わりよりも、次の点を重視していると考えられる。

(6)　複合語全体の意味カテゴリーを決める上で中心となる要素を右側に置く。

(1)と併せて、これもまた同格複合語の構成素順を決める話し手の意図のひとつとして考えることができる。

4. 同格複合語の「非等位性」と「等位性」

以上の議論を踏まえて、同格複合語の構成素間の関係を考えたい。2 節で見たような談話との関係を重視した場合、構成素は(7a)のような関係にあり、3 節で見たような意味カテゴリーを決めることを重視した場合は、(7b)のような関係にある。

(7)　a.　旧情報＋新情報　[談話との関係を重視 (cf. (1))]
　　b.　修飾要素＋被修飾要素　[意味カテゴリーを重視 (cf. (6))]

このように実際の使用場面から見ると、どちらの場合においても、構成素の間には非対称的な関係、つまり、「非等位性」があることが分かってくる。では、同格複合語の「等位性」はどこに求めることができるだろうか。本稿では、左右を入れ替えたいずれの構成素順においても同一の対象を指示することができる、という点に注目したい。例えば、(2)の文脈において author-artist を用いても、その逆の artist-author を用いても、どちらも同一の指示対象である Ed Emberley（「作家」と「画家」の両方の性質を持った人物）を表すことができる。このような意味において、同格複合語の構成素間には「等位性」があると見ることができる。

5. おわりに

同格複合語の構成素順は、談話との関係や意味カテゴリーの決定という観点から話し手の使用意図に合わせて決定される。この観点から見てみると、同格複合語の構成素間には「非等位」な関係性があることが分かる。一方、同格複合語が「等位性」を持つと言えるのは、どの構成素順・解釈においても、同一の対象を指示するという点においてである。だからこそ、「左右の構成素を入れ替える」という手段を、話し手の意図に応じて用いることができるのだと言える。このような性質は、同格複合語をそれ単独ではなく具体的な使用場面との関係を含めて考えることで初めて見えてくる。形態的・語彙的現象を言語使用の場から分析することは、そこに現れる話し手の使用意図に加えて、現象自体の性質をも明らかにすることにつながるのである。

【参考文献】**Bauer, Laurie (2008)** “Dvandva,” *Word Structure* 1, 1–20. / **Bauer, Laurie, Rochelle Lieber, and Ingo Plag (2013)** *The Oxford Reference Guide to English Morphology*, Oxford University Press, Oxford. / **Lohmann, Arne (2014)** *English Coordinate Constructions: A Progressing Perspective on Constituent Order*, Cambridge University Press, Cambridge. / **Naya, Ryohei and Takashi Ishida (2021)** “Double Endocentricity and Constituent Ordering of English Copulative Compounds,” *Data Science in Collaboration* 4, 49–57. / **Olsen, Susan (2001)** “Copulative Compounds: A Closer Look at the Interface between Syntax and Morphology,” *Yearbook of Morphology 2000*, ed. by Geert Booij and Jaap van Marle, 279–320, Springer, Dordrecht.

＊ 本研究は、JSPS 科研費 19K13218 の助成を受けている。